弘法大師
和讃畧解

野峰松韻

特71
591

9
964

300949−000−8

特71−591

野峯松韻（弘法大師和讃略解）

佐伯慈明／述

M11. 11

ABA−0048

ISSEIDO
東京 一誠 神田

大講莪伯慈明著

弘法大師 和讃略解

野峰杉談

眞言宗大教院藏版

77W12657

[illegible]

大師

莊獵

高野山主快猛

特71/591

野峯松韻巻上

大講義佐伯慈明述

第一

出世深恩　王藻歸るて讃岐潟
歸命頂禮遍照尊　寶龜五年の六月に　衆生の為に身を捨て
屏風浦に誕生し　御歳七つの其時に
五の嶽に立雲の　立る誓ぞ頼もき

這の八句の中。初の四句ハ。吾宗祖弘法大師ハ。今を距ること一千一百餘年の昔。人皇四十九代光仁天皇の御宇寶龜五年六月十五日。讃岐の國多度の郡。屏風ヶ浦の御館ニ降誕ーみへり。御父ハ佐伯直字ハ田公諱ハ眞氏高皇産靈命二十三

188.53
52.4.15
77W13857

世の後亂なり。而して十四世御物宿禰の御時。始て佐伯姓を賜ハる。十五世倭故連ゑ至て。人皇二十代允恭天皇。始て讃岐國造ゑ任ず。其後世々讃岐國ゑ住しゑゑが故ゑ。世に讃州佐伯と云へり。御母阿刀氏ハ。宇麻志麻治命の御子。味饒田命の裔なり。或時阿刀氏の夢ゑ。天竺の聖僧懐ゑ入と見て。御姙身遊バされ。遂ゑ十二箇月を經て。御誕生あらせゑゑ。時ゑ黄なる雲屋上に覆ひ。金色の光明室中を光す。御両親御歓限無く。御名を真魚と申奉る。且又稚遊ゑを駮鶏竹馬として。竹馬ゑ乗り。鶏をさゝかくしゝと云様なる戯無く。或ハ泥土を以て佛を造り草堂に安置して拜しゑゑ。斯く凡ならざる御行跡を視て。御名をまゝ。貴物と號けゑへり斯くて御父母ハ申に及ざ。御一門の人々等まで手中の珠と御寵愛あらせられさるを。今畧して述しなり。次の四句ハ既に七の御時に。竊に高山の頂ゑ登り。小さく美しき御手を合せ。諸佛ゑ誓てのゑハく。我れ此一生に成佛し。衆生を利益することを得べくバ。釋迦如來御形を現ぜし。證明しゑへ。願叶ハずバ今此命諸佛ゑ供養し奉らんと。峻しき嶽より。谷底へ身を捨ゑゑ。其時に不思議なるゝを。天人忽に天降り。中に抱きて助けさり。又其時に麓より。奇しき雲の立上ると見にしが。釋尊百寶の蓮華に乗じ。大光明を放て。拜まれさせゑひられバ。大師御喜限

なく。涙を流して禮拜しみよ。是より彼山を出釋迦の嶽と名けより。即今の善通寺五の嶽の隨一なり。僅に七の御年に。斯くまで深き御誓ひ。諸人を御度け下さるといよ思召ハ。實に有難く末頼もしき事ぢやと云ことを述たるなり

各位能く聞きなへ。楠檀ハ二葉より馨しく。蛇ハ一寸よりして其意を得とう。大師ハ本より凡人ハ非ず。上位の菩薩の宿願ならで。吾日本の讃岐の國へ降誕しみよとハ申ながら。人間に應同せらるゝ以上ハ。やはり我々と同じ人間中間に相違無し。然るを僅に六や七の時ハ。世間の凡夫の善惡を辨へず。日夕に營々として衣食の獄ハ繫がれ遠近ハ趣逐て名利の坑ハ墜つと明るうら暮るまで。又暮るから明るまで。貴も賤も。到底ところハ只。喰みことと衣るにとと名聞利養の爲ハ驅使ハれて。毎日々々數多の罪を作るを御覽なされて。扨々淺間しい事ぢや。是を此儘捨置さならバ。終ハ閻魔王の御裁判ハ任せ。五尺の軀の身代限ら。但しハ三惡の懲役へ追込らるるう。又ハ三途の河原で斬罪ハなるう。死出の山路で桀にかかるう。八熱地獄の火炎う。無間地獄の釜煎う。どうて善處へハ行うれまじ。冥途の官員ハ緣者ハ持さず。地獄の曜卒に親類ハ無し。誰が贔負をしてくれう。去とハひどい事ぢや。不便なことぢやと思召ていうにも我れ彼等ハ緣者となり。

親類となつて。贔負をしてやりたい。救てやりさいと。稚意に命を督て。諸佛の御誓遊ばされさと思へば。有難いとも勿體ないとも。詞は行まる御慈悲に非ずやそれ故遂は。即身成佛遊ばされて。思召の儘に衆生濟度あらせらる。此事を深く感心せられて。西行上人の歌に

田り逢さん。事の契ぞ。頼もしを。嚴しき山の誓見るにもと

是ハ彼上人在世の昔。四國地へ行脚せられて。大師の御舊跡を慕ひて。彼地は暫く錫を留められさる時。彼山は登りて詠れさる歌なり。此歌の意ハ。斯の如く無比の誓願を發されさるらさハ。假令いかなる惡人さりとも。御緣は回り逢さらバ。必御助下さるは相違ハ無し。頼もしい事かなと。大師の誓を深く悦びさる歌なり。又此山を遠くより見れバ。筆の形に似て。まるくと山の巓の尖されバ。筆山とも云なり。同じ上人の歌に

筆の山。かさ登りても。見つるかな。苺の下なる。岩の氣色を。

是も逗留中に詠れさる歌なり。此山は昔より筆草として。筆に能く似さる草生せり。又此山は近き處の海を。筆の海と云ひ。又筆の洲。水筮の岡など云處なり。皆讃岐の國の名所なり。夫に付き此頃奇なる事なり。廣嶋縣の士族。秦氏なる者の老母なりとて。余が住せる寺に詣し。因て語る。吾れ弘法大師を信

仰するこ茲ハ年ゆり。曾て不思議の事ゆり。或時一人の旅僧來りて休息を乞ふ。因て飯るど與へてもてるしけれバ。彼僧大に喜びて言く。吾郷里の山ハ生ずる筆帥ヲ持てり。此を以て汝に謝せん若疾病ある者の體ハ。此筆を以て大の字を書し。且光明眞言七遍を唱へるハ。病立處ハ差るんと謂て。草三本を我ハ與ふ。由て其國郡を問へども應せずして忽ハ去る。其後之を試るハ果して證あり顧ふハ大師の化身からんど余之を察するに。是れいとゆる彼筆草なるべし。此老婆今現ハ福山ハ住居し。其利益を得る者許多なり。是ハ由て諸人異名して。大師老婆と云へり。斯くまで御慈悲深き。大師に御緣有て。飽まで祕密最上の法義を聽聞し。且彼尊の御宗門ハ入りさるゝらハ。朝ハ夕ハ心をとどめて。偏ハ彼尊の加持力に縋り。オンアボキャ。ベイロシャヤナウ。南無大師遍照金剛。と日課の眞言をも唱へし。後で。寶號を七遍づゝ怠らぬ樣ハして世ハゆる間い無事息災。此世終らバ其儘ハ。散らぬ花咲く極樂の。玉の臺ハ登らんと。安心決定するゞ肝要なり

第二渡唐傳密

遂ハ則延曆の　末の年ある五月より　藤原姓の賀能等と
震旦船ハ付を得て　志ゝを殘ハ一本の　松の光を世ハ廣く
弘めゆへる宗旨をバ　眞言宗とぞ名づくる

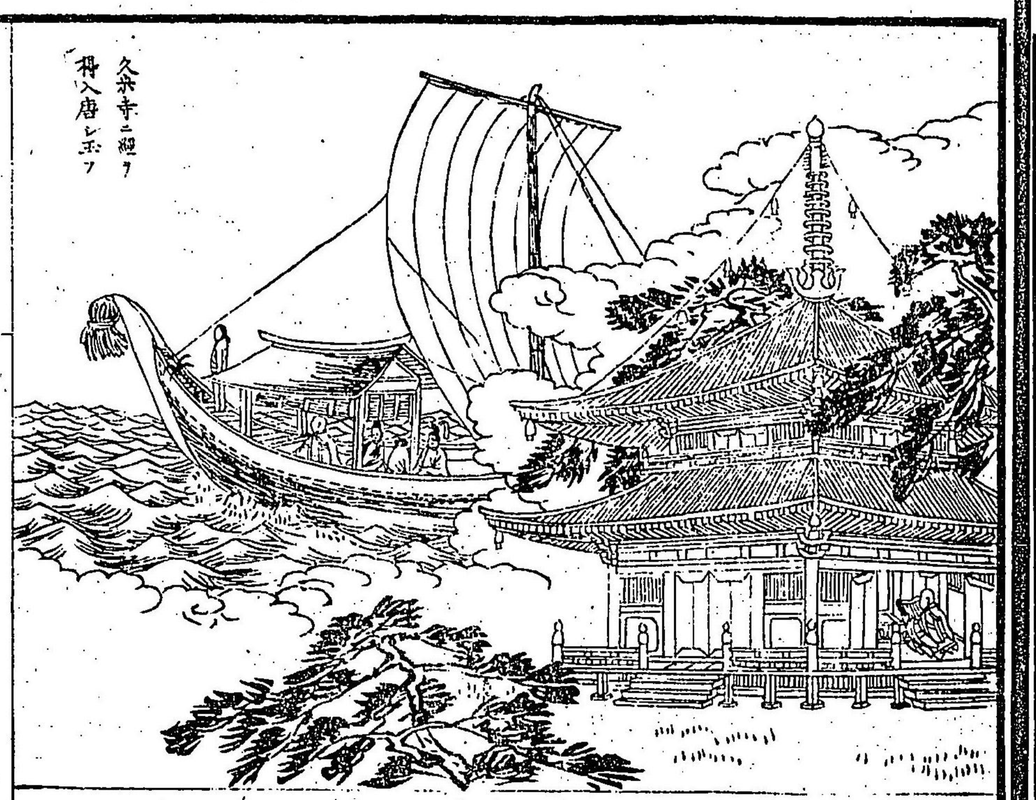
此八句の中。初の二句ハ。大師御年十二ヨリて。舅氏阿刀の大足朝臣大夫ヨ就て。孝經論語等の諸書を讀ミ習ひ。十五の年御上京ハり。尋で大學校ヨ入り。味酒の淨成又ハ岡田の博士ヨ從ひ。あらゆる儒典を學び盡し。竟ヨハ諸先生方ガ。席を讓る程に成りぬふと云。然れども大師ハ出塵の思とて。出家の御望おそ〳〵れバ。叔父君等ハ。其御秀才なるを惜みて。何卒儒門ヨ留め置ぞやと。時々大師ヨ語りて曰。人と生れて。忠孝の二必捨へからズ。又父母の遺體を毀ず。危ヨ臨で命を授け。名を舉げ先を顯すハ。一を闕ても不可なり。今汝出家を望むハ。惟寔ヨ大僻なり。宜しく早く心を改めて。吾等ガ言の如くせよと。猶ヨ昔の義士や。又孝子の行跡を引て。ドウでも出家するハ宜しからぬいと。段々と御留なされされバ。大師の仰せらるるにハ。余不肖なりと雖。木石ヨ非れバ。父母の高恩骨ヨ鏤め肌ヨ銘ドて。敢て忘れハいささじ。決して其言ヨ背きハせじ。然れども常々おもへらく。提葉凋落して久し。龍葩何れの春をか待ん。吾生の愚なる。誰ヨ頼てか源ヨ還らんと。御歎息あつて乃。三教指歸三卷を著して。叔父等へ御見せ遊ばさる。扨其中ヨ思召の程を。委しく御演なされさる御詞ヨ。僕聞小孝用力。大孝不匱是故泰伯剃髮永入夷俗薩埵脫衣長爲虎食等。是ハかうトや。孝行の中にも。小さな孝ハり大な

る孝なり。小孝ハ父母の慈愛を思ひて。ふづゝら己が勞苦を忘る。大孝ハ其行を天下に及ぼす。昔文那ハ太伯と云人ハ。周の大王の子にして。王季歴と云し人の兄なり。弟なれど季歴賢よして。且聖子昌あり。父の大王季歴を立て。昌ハ傳へんとするに及んで。太伯身髮文げ髮を斷ちて。用ふべからざるを示せと。又薩埵脫衣とハ。過去世の時ハ。國王に三人の王子ありき。幼をバ名づけて薩埵王子と云。一日國王三子と共ハ。山林ハ遊觀す時ハ薩埵王子。一の虎の七ノ子を生ふて飢渴ハ苦むを見て。竊ハ林中ハ入て。身を以て虎ハ與へ食せしむ。父母之を聞て悶絶して將ハ死せんとに。此に因て視れバ。二親の遺體を毀ひ。念傷を致すと。誰か又此二子ハ過ぎんや。今叔父等の言ハ如くなれバ。此人々ハ甚不孝者なり。然りと雖泰伯ハ至德の號を得。薩埵ハ大覺の尊と稱せらるゝと有テ泰伯ハ末代迄も德行人の標準となり。薩埵ハ釋迦如來と成て。一切衆生を濟度す。然る時ハ。苟も大道に合ハゞ。何ぞ近局ハ拘らん。羅十の母の苦を拔き。那舍の父の憂を濟ふ。寧大孝に非ずやと。其より親戚を辭して。ふづゝら誓て近士となり。御名を無空と改め。朝市の榮華を厭ひ去りて。處々ハ御遍歴あり或ハ阿波の大龍の嶽ハ登り。曾て勤操僧都より授みひし。求聞持の法を修行遊ばされ。亦ハ土佐の國室戸の岸ハテ坐禪

觀法あらせらる。其時の御歌ハ

法性の室戸と聞けど。我すめバ有爲の浪風立ぬ日ぞ無き。

此歌の意ハ。法性の室戸とハ。即淨土のことなれど。今日我が打視る所でハ。やはり浪風さてる。荒海なりと云ことで。是ハ畢竟。御謙遜の御歌なり。實ハ彼尊の御胸中ハ於てハ。常樂我淨の四顚倒ハ無き故ハ。何れの處ハ住しみふとも。性相常住の淨土ハ相違ハらじ。又ハ凡夫の心を。御詠じ遊ばされさと見ても宜し。夫より御年二十ニて。和泉國槇尾寺ハ於て。勤操大徳ハ從て。御剃髮遊バされ。御名を教海と改め。後ハ又空海と改めぬ。雪螢を猶怠るハ拉ぐと有て。日夜學文怠ること無く。竟ハ三乘五乘十二部經。凡そ日本ハ流傳せし所の教法盡く御學び遊ばされれど。猶ほ普通の佛法ハ。末代重障根鈍の衆生を助くるに。甚六筒敷と思召て。此上ハ不二一心の法を示しみへと。三世の諸佛ハ御祈遊ばされて。竟ハ大和の國久米の道場ハ於て。大日經一部七巻を御感



得たり。則緘を解て覽ぬよ。猶滯ありと雖。彈問するに處無
けきバ。其れより入唐求法を思召立ゼられ。早速其趣を　奏
聞たりしが。　勅許たりて。即延暦廿三年五月の初。大師初ま
一切衆生を濟度せんと。無比の誓願を發しゝ。ひしより。今御
年三十一まて。入唐求法遊ぜさるる所迄のまを。遂ま乃延暦
の末の年なる五月よりと。述さるる。次の二句ハ正四位下
藤原の賀能朝臣として。吾朝より支那への御勅使。即越前の國
司なり。此人と共ま御船まめされ。五月下旬浪華の浦を出帆
し。三千七百里の海路を凌ぎ。八月十五日支那の福州の津へ
御着船たり。折節彼國の重役病ま罹りて官を辭しいまゞ後

役の定まらざるま付きて。彼是延引まるる。漸く十二月長安
ま到り達す。而して唐の第十五主順宗帝ま見えて。乃勅ま依
て西明寺ま住しぬふ。其より青龍寺慧果和上の高德を聞せ
られて。急ぎ行て御逢なされとされバ。和上咲を含みてのみふ
にハ。我汝を待ま久し。來るま何ぞ遲き。我が日も既ま山端ま
傾き落る斗なり。早く灌頂壇ま入り。無上の覺位を證ぜよと。
亦御弟子等へ仰をらるるみな。日本の沙門空海ハ。三地の菩
薩なりと。斯く御懇ま仰をられされバ。大師ハ感涙地ま灑ぎ。
歡喜の涙ま袖をまぼりぬふ。夫より和上の御弟子となりて。
秘密の奥義。大日經の深旨。殘る方無く授かりぬふ。既ま其年

の十二月廿五日和上御年六十にて御入滅ありければ。大師悲歎に堪へず。多日一室に入て。專御修法あらせられ。彼是る内に年も暮き。明れば元和と改元あり。憲宗帝の御代となる。猶も三藏聖教の。吾日本に無き書籍四百六十一卷を。人に頼て自も書寫しめて。遂に秋八月御歸朝あらんと。其由を帝に奏聞ありしかば。帝は離別を惜ませぬひて。朕が形見とも見めとて。菩提子の數珠を賜はせたり。是近のことを畧して。唐船にはりを得てと述たるなり。次の二句は。大師の唐の天子へ御暇乞ならせられて。朝より退き。既に明州の濱に艤の時。三股杵を擎げて曰く。汝先去て。祕密相應の靈地に到り。我歸朝を待べしと誓ひぬひて。東に向ひて擲めへば。三股は鳥の飛ぶが如く。天に冲て遠く去りぬ親らり見る人々。大師の願力を感じけるとや。猶も支那に御逗留中。筆法の妙を現し。亦は定中に。天竺へ渡らきぬひし等のと。枚舉に遑ざれば。今之を畧す夫より御船既に纜を解き。萬里の海上を。潮と共に東に去り。平城天皇大同元年十二月廿二日。恙無く筑前に著めへり。其冬は觀世音寺に止りて。明年の夏京に入り。敕ありて和泉の國の。槇尾寺に住しめふ。大同四年の秋又敕あつて高雄に移りぬふ。弘仁元年東寺の別當となり。又東大寺の別當を兼ぬ。共に其職に在ること四年なり。弘仁七

年御年四十三ょて。高野山を開きゐふ。初め紀の川の邊ょ到らせゐふょ。狩場明神出現しゐひ黒白の二犬を遣し。山路を教ふ。之ょ由て山の嶺ょ至りゐふょ。彼の唐の明州の津ょて。投ぎきゐひし三股。光を放ちて松の梢ょ懸りけるが。自下りて大師の御手ょ入しるバ。彌密法相應の地なるを喜びゐひて。高野一山を圖ょ顯して。嵯峨天皇へ奏聞有けれバ。早速官符を賜りて。伽藍を建立しゐふ。其よりして眞言宗。我日本ょ廣く弘まれり。此事を。證を殘す一本の。松の光を世ょ廣く。と述さるなり。斯くまで高祖大師ハ。御幼年の時より。種種様々と御苦勞遊ばされ。別して此度の御難難ハまさる違ふさるらバ。御身を大海の底ょ沈め。鯨魚の餌食ぐるらんゐ。更ょ御厭無く。何卒惡人女人の差嫌無く。僅ょ唱ふる眞言を。寶號なり。其を緣として。七寶莊嚴の花の臺ょ。御導下さらんとの。御誓願なり

第三宗德呪益

眞言宗旨の安心に　上中下根の別なくて　下根を示す易行ょハ
淨穢を擇ぐず其儘に　偏ょ光明眞言を　行住坐卧ょ唱ふれぞ
宿障ろふ消果て　往生極樂定りぬ
一切有情放逸ょして。三寶を憎み嫌ひ。廣く惡業を造り。當ょ
三途八難の惡趣ょ墮つべきゐ。一切の餘法ハ。救ひ度くるを

能ハず。唯祕密無上の大法のみ有て。能く救ひ得と。是ハ攝眞實經ゟ説みへる所なり。我等が如き。淺猿く罪深き衆生ハ。唯眞言陀羅尼のみ能く度ゆゑ。外ゟ度くべき法ゝ無し。殊ゟ光明眞言ハ。淨不淨を擇ず。常ゟ之を唱へよとの。佛祖の御許ゝれバ。下根の在家ゝ至て唱易けれバ。此上ゝ無き有難きと。但偏ゟ光明眞言の外。脇目をふらず。口癖ゟ唱さつそれバ。設ひ信心決定と云迄ハ至らずとゝ。必淨土ゟ往生すべき旨ハ。不空羂索經大隨求經等の中ゟ。其意分明なり。況や復信決定して唱ふれバ。忽佛の願力ゟ冥合して。無始以來の煩惱業障の雲霧ゝ。いつゝゟ月の光と成て。本來胸中の淨土ゟ。往生を遂らるゝと云ゝと。今の和讃の句ゟ述さるなり。扨其口癖ゟなる樣信決定する樣ハ。いゝゟまゝなれバ。先毎朝手水をつゝふゝ其儘。いゝゟる家業繁多の人と云とゝ。光明眞言三遍宛怠らぬ樣。猶又閑暇なる人ハ。更ゟ百遍二百遍。乃至千遍の日課を定めて。行住坐卧ゟ唱へさつすれバ。遂ゟハ口癖となる。亦口癖ゟなる樣ゟ成れバ。自信心ゝ決定するなり。又其彌信心決定〳〵る證ハ。如何と云ゟ詩ゟ。淑氣催黃鳥と云句乃り。冬の間ハ幽谷ゟ隱れて居る鶯ぞ春ゟなれバ。谷ゟより出て里ゟ遷りて長閑に鳴く。鶯の意ゟ春ゟ成さる故ゟ里へ出て。花やうに啼て聞うさうと云氣ハ無けれどゝ。春の陽氣ゟ催

されて。我知らず自然と啼くなり。今も其如く。信心決定の陽氣が内より催しさるらば。唱へうとは思はれども。自オンアボキヤと。口へ出る樣なる。若いまだ自然と口へ出ざる限ハ。歌は

春來ぬと。人はいへども。鶯の。啼ぬ限ハ。うとうとぞ思ふ。

と云る如く。何程信者しや。極樂參は相違無い人じやと。人目ハ見えても。天然自然の鶯が。聲ものどうふ。オンアボキヤ。ベイロシヤナウとなぬ限ハ。眞の信心決定。淨土往生の人ハあらば。且又信心相續の爲ハ。オンアボキヤと。初の一句を唱へてもよし。猶又病氣等ハて。アボキヤとも唱へ難き時ハ唯。オンアボキヤの。アぐうりを。息はつきて誦念すべし。自然と信心決定すべし。故は大日經は。阿字ハ一切如來の加持しぬる所なり。佛を見。菩薩は同會せんと欲とバ。阿字を念ずべし。と說ぬひ。又金剛頂經はハ。纔は念ずれバ。一切如來の法を稱ふるは同じと說ぬへり。斯く意得て。光明眞言ぞは持ち誦じるバ。何を授ゝらずとも。淨土往生は事欠くべうらば。世人を見るに。多くハ病人の大切なるは及んで。物をも分ざる時は。俄は十念は臨終よし。騷くあり。愚なるなり。斯る時は臨てハ。家内隨分靜はして。光明眞言を絶さば唱ふべし。此功德とそ遥はまさりて。往生の因緣ともなるべうれ。臨終

まハ如何なる人も。或ハ病氣ま犯されて死ぬるか。劔難又ハ火難水難まて死ぬるもあり。宿業まよりてハ圖りがたし。若斯の如き死期まに至り。一旦の妄念を發さん外。爭でか凡夫の習なれバ。念誦の心も發り。往生の願心も起るべけんや。平生の時まに期する所の約束若違ひなバ。往生の望空しかるべし。然れバ平生まに往生をと意得て。平生まに安心せんが肝要なり。されバ人間一生の大事と云ハ。死ぬる時まに狼狽ざる覺悟なり。設ひ何程富貴まに暮すとも。何程學問藝能ありとも。後世の安心疎かにして。うかうかと死去りてハ。恩愛の親夫妻子も。一度死別てハ。いかなる處まに居るやら。再び會ひ視ることもならず。犬猫の死ざも同樣のとまに成果てハ。折角萬物の靈とも いてるし人間まに生れて。逢難き佛法まに値ひたる甲斐も無し。それとも彼。泰山を挾て北海を超と云樣なる。迚も力の及ざぬとならバ。是非も無いが。畢竟長者の為まに技を折と云樣なる。いと安き光明眞言を唱ふる丈のことて。父母及び一切有緣の衆生の。生處が知らるゝと云ハ。何より最易い。結構なことでハ無いか。されど夫もいやじや。唱ふるが大義なと云ふ。無性有情とて。諸佛の願力ふも叶難しと知べし。天保年中の頃。讃岐の國三野郡。吉津村吉祥寺まに眞海和上と云し知識なり。本ハ仁尾覺城院の僧なりしが。世を厭て。比地村の岩屋寺まに住し。

亦ハ吉祥寺ニ寓居し。終ニ同寺に於て寂せり。壯年の頃。阿波瑞泉院天廬上人ニ從て。祕觀を授ケり。勤修怠らに。遂ニ以て觀達す。其頃吉祥寺の檀家ニ。谷善右衛門と云信者ありり。其老母。曾て眞海和上の法話を聞て平生唱へし所の。十三佛の眞言等ハ。暫く相止め。唯光明眞言一ニ定め誦持すること已ニ數年ニ及べり。一日眞海和尚ニ見えて問て曰。前年和上の教諭を蒙りし時。和上より賜ハりたる所の墨書の阿字。此頃白色ニ見ゆるハ不審なり。と有ければ。和上曰。念誦の功の積りて應ずり寔ニ感心なり。猶怠らすハ。遠からずして金色ニ見ゆべし。併是等のことハ。擅ニ不信の人ニ語るべからに。誡めとり。其後幾程なくして。和尚滅ニ入り。吉祥寺住職其も尋で寂す。時ニ從來眞海和尚ニ隨從せし。前吉祥寺弟子密道。同寺ニ住職せり。一日彼老母來りて密道ニ問て曰。吾昨夜の夢ニ。門を出て見るに言語ニ及ぶに奇麗なる道ありり。行行て一の河邊ニ至れば。岸ニ並木の枝もさゝへ。其花の白きありり赤きありり。金色なるありり。異香郁郁とし。百鳥和鳴し。恰も弥生の空ニ異ならず。いかなる里ならんと首を問せば。忽然として夢覺さり。是ハ何の夢ぞと。密道曰。余も又何の夢なるを知らすと。其後七日を經て。善右衛門來りて密道ニ謂て曰。老母今朝例の如く念誦畢りて。少しく疲れさる樣なりとて。堂ニ入

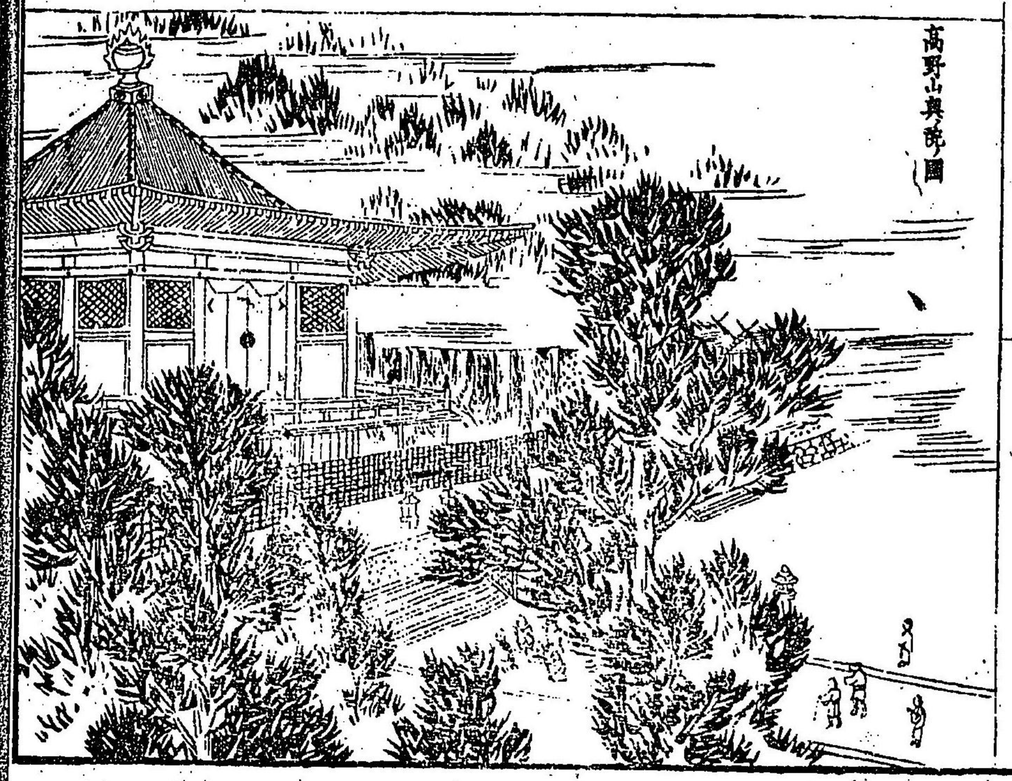
て休ふ。自然臨終をらんも圖難し請ふ來て法話を說ぬ一と。密道至り。即堂ゑ行て之を瞻るに。其貌眠れるが如くまして。已ゑ入寂をり密道其後阿彌陀經を讀誦するに及で。歎ずて曰。嗚呼尊い哉眞言念誦の功德。既ゑ七日前ゑ在て。極樂の體相を髣髴す。往生淨土疑無しと。然して密道ハ余が知己なれバ。平生時々聞ける所の故ゑ畧記を。因て各方ゑも。光明眞言の功德の尊きを伐。自得せられさらバ。親ハ子ゑ勸め子ハ親ゑすゝめ。妻子眷屬。立子這子に至るまで。慈悲を施し情をうけ。相互ゑ信心を發さしめ。オンアボキャと。口癖ゑある樣ゑ成さらバ。家内自一和し。心ゑ掛る雲も無けれバ。當來花の臺ゑ永く相語らひ。共ゑ樂こ暮さんをハ云ゑ及ぐべ。此世うらをや極樂の心地して。貴も賤も。男も女も。貧しきも富めるも。平等ゑ度ると。之ゑ過さる孝やある。之ゑ勝れさる仁やある。心ゆらん人ハ。深く之を思ふべきなり

第四留身成緣

不轉肉身成佛の　身ハ有明の苔の下　誓ハ龍華の開くまで
忍土を照を遍照尊　仰げハ高野山　雲の上人賤の男も
結ぶや緣の蔦かづら　縋りて登る嬉しさよ

此八句の初の二句ハ。高祖大師曾て。我一生ゑ成佛して。一切衆生を濟度せんと。大誓願を發しみひしゞ故ゑ。遂ゑ其願を

成就して。清涼殿に於て佛身を現しゐひ。今高野の奥院に。永く肉身を留めとまへるを述ぶ。次の二句ハ彌勒尊出世の三會の曉まで五十六億七千萬歳の間無佛世界の衆生を濟度しゐいんとの御誓願を云ふり次の一句ハ斯くまで深き御誓願を發し肉身を其儘留めゐへる山なれバ。慈


高野山奥院圖

圓僧正の歌に

有難や。高野の山の。岩ぐゝ。大師ハ今に。御座まするゝと

他宗の先徳さへ。讃嘆しゐへる高野の山なれバ。廣大なる有難い山と云ふを云ふなり。此慈圓僧正と申人ハ。叡山の先徳にて。親鸞上人の剃髪の師範なり。次の二句ハ。既に當年五月に。去る尊き御あさりの。御登山ならせられなる如く。昔も今も。上ハ　萬乘の君を始。月卿雲客の歴々方より。下ハ漁父山賤の。末々に至るまで。皆高野〳〵と言て參詣する。是を縁の蔦づゝら。偏に彼尊の加持力に縋り。八葉蓮臺に膝を結ぶ。實に喜び〳〵なりと云ふを。述べるなり。初の四句に付

て。大師御入定の其謂を畧示せば。凡そ常途の佛法まてハ。正像末の三時と云ふが有て。盛衰大ゟ同じからず。釋尊の遺法ゟ付て之をいふに。釋尊の滅後ゟ在て。佛法の世間ゟ住する。正法千年。像法千年。末法萬年。合して一萬二千年の間なり。今の世ハ。既ゟ末法萬年の時ゟ當りて。法威大ゟ衰へされば。假令精進修行の人ありとも。利益を得がたき時節なるとハ。大集經等ゟ説みつり。顯教ゟ於てハ。是の如く盛衰ありるとハ。垂跡の釋迦如來。人間ゟ應同して説ゐふの法なれバなり。然るゟ眞言の教主大日如來ハ。諸佛の本地ゟして。三世常住不生不滅の佛身なるゟ故ゟ。其所説の眞言ゟ。亦是法尓常恒の。一切佛法の本體なれバ。此一宗ゟ於てハ。更ゟ正像末の興廢を論ぜず。故ゟ大師の御釋ゟも。人法法爾興廢何時。機根絶々。正像何分。文故ゟ眞言の經軌の中ゟハ。專像末の利益を説ゐつり。されバ弘法大師像末の時ゟ當り。即身成佛しゐひしより以來。興教大師。如法上人。寛朝僧正。琳賢阿闍梨。願行上人等の如き。末法惡世ゟ出されども。即身成佛の人少からず。唯一是等の諸德ハ。因緣ありて儻其證迹ゟ。他の見聞ゟ顯れさるなり。自餘の德を蘊て其證迹を露さざりし人。古今幾許ぞや。有緣の人ゟ非ざれバ。誰ゟ其佛身を拜するを得んや。又光明眞言を唱へて。往生淨土を遂さる人ハ。余が見聞する所の。

信男信女の中ゐすら。間これあり。是皆眞言不思議の功德。大師加持力の致す所なり。且又無量壽經ゐハ。特留此經止住百年と說て。末法萬年を過て。一切經法滅盡の後ゐも。弥陀の願力ゐ依て。獨此經のミ。世ゐ止るゝ。更ゐ百年とあれども。此百年を過れバ。名字をも聞くとゝならん。偏ゐ五濁濫漫して。無佛の世となると見えたり。唯識了義燈ニ曰。言ハ値ル佛ニ者。有ル佛ニ教法ニ。從テ他聽聞ス。亦名ル値ル佛ニ。雖有ル佛ニ教ニ無ル人ニ傳ル說ヲ。名無佛世文 悲いかる生れて彼時ゐ値ん輩。いづきの佛ゐ歸し。いづきの法ゐ由てか。生死流轉の苦を免きんや。爰ゐ吾高祖大師のミ。彼諸佛の。方便ゐ漏さる所の。無佛雜染世界の衆生を鑑て。廣大無比の願を發され。不滅の眞言を以て。天下國家を鎭護し。處〻ゐ分身して。惡業の衆生を度けんと思召て。不死の佛身を此山ゐ留めゝへると。此と入定留身の誓願と云なり。彌陀の誓願深重ゐして。淨土の莊嚴微妙なりと雖。教法滅盡せバ。誰かハ教へ誰かハ導ん。とすれバ大師の方便。諸佛ゐ超過して。眞言の教法末代ゐ大利益ならん〻。知べきなり。然れハ則。末法萬年の末より。弥勒出世の曉ゐ至るまで。五十六億七千萬載の間ハ。唯眞言の一法のミ世間ゐ止まつて一切衆生を利益さんと顯然なり。是又末代惡世ゐ生るゝ衆生ハ。多分重障根鈍なれバ。甚深の法力ゐ非れバ。度ること能ハざるが故なり。無佛の衆生猶利しゐふ。況や末代今時の我等

とや。又後の四句は付て。結縁の功徳を述れい。昔齋藤瀧口時頼（平家物語）と云し人ハ。元ハ平家の侍ゝて。三位中將維盛の内の者なりしが。十三の歳より。御所へ參り勤め居るに。建禮門院の雜仕。横笛と云女と契を結べり。父の齋藤左衞門此由を聞て。世を在ん者の智なれ成し。出世さきんと思ひしゝ由無き者ゝ思初ーるゝと。痛く諫めけまバ。瀧口思ふゝ。西王母東方朔と聞えーー者れ。名をけゝと聞て目ゝハ見バ。老少不定の世中ハ。夢幻の如くなり。見にくき者を見て何ゝせん。思とーーきを見んとそれバ。父の命を背くゝ似とり。是幸の善知識なりと。已ゝ十九歳の髪を落ーて。嵯峨の往生院ゝ住す。横笛之を聞傳へゝ。設ひ世を背くとれれ。などゝ斯くとい知らせぬいざる。さとゝり人ハ心強くとれれ。尋て恨ゝんと思ひ或夕方都ゝ出て。嵯峨の方へゝぞゝくゝかれける。頃ハ如月十日餘りの事なれバ。梅津の里の春風ゝ。さそふ匂れなつゝーく。大井の川の月影れ。霞ゝこめて朧なり一方ならめ哀され。誰故なうぬ思ゝて。往生院とハ聞つゝれど。さどゝゝ何處と知らざれバ。此ゝやすらひ彼ゝとゝずゝ。尋兼しぞ哀なる。かくて住荒しさる僧坊の中ゝ。念誦しゝゝ聲の聞えけるを。惜ゝ瀧口入道の聲ぞと聞すーて。御様の變りておとすゝをバ。見もし見えれし參らせん爲に。さらとこそ是迄參り侍へと。具しとる。

女もて云せけれバ。瀧口入道胸打騒ぎ。浅猿きに障子の隙よりのぞき視れバ。裾ハ露袖ハ涙ニ打ぬれつゝ。少し面やせとる面貌。誠ニ尋兼さる有様ハ。いゝか大道心者も。心ハさゝ成ぬべし。瀧口入道人を出して。全く是ハさる人なし。若門ニがへ立てもや候ハん。と云せとりけれバ。横笛いと情なう。恨めしけれど。力及ばぬ。涙を押へて帰りけり。其後瀧口入道。同宿の僧ニ語りいるハ。是處も世ニ静ニて。念誦の障ハ候てなども。あゝで別れし女ニ。住居を見知られ候へバ。設ひ一度ハ心強くとも。又も慕ひ来んとあらバ。心も動き候ひなん。暇申して。夫より高野へ登り。清浄心院ニ行ひすまして居さり鬼

横笛も様をゝへぬる由聞えけれバ。瀧口入道一首の歌を贈りけゝ

そるまでハ。恨みしかども。梓弓。誠の道ニ。いるぞ嬉しき

横笛返し

そるとても。何ゝ恨ミん。梓弓。引とゝむべき。心ならねバ

其後横笛ハ。奈良の法華寺ニ在けるが。其思の積ニや。幾程も無くて。終ニ果なく成ニけり。或夜瀧口入道の夢ニ。横笛が霊魂来りて。語りけるハ。我れ愛欲の念ニ引かれて。生を浅猿き鳥類ニ受さりと雖。君が此山ニ入ひし縁ニ由て。逆即是順の利益を蒙り。今又尊き霊場ニ来れる功徳を以て。畜生の

業を轉して。天に生ずることを得さり。されバ吾淺猿ゝりし本の姿をバ。井の邊に殘し置きぬ。猶能く〳〵とぶらひみゝと云と見て夢さめさり。入道驚きて井の邊を見れバ。果して鶯の死しさる有り。哀に悲しくて。其が爲に佛を作り。御頭の中に彼鶯を籠めて。今も鶯の弥陀と云傳へさり。是より入道世を厭ふ心彌増に成しゝバ。述懷の歌に

高野山。名をどふ知らで。過ぬべし。憂をよそるる。我身なりせバ。是瀧口入道。若彼時猶も嵯峨の奥に居て。重て横笛が尋來りさらバ。入道も猶凡夫のこゝろなれバ。思そず心よさうなり自然本意を背くこゝろならバ。共に永く惡道に落て。無量の苦しをも受べきに。大師入定の靈場なる。高野の山に入されバこそ。斯るめでさきこゝも有けれ。是等の利益を今。結ぶや緣の蔦ゝづら。絡りて登る嬉しさよ。と述さるなり

第五法雨護國

昔國中大旱魃　野山の草木皆枯ぬ　其時大師敕を受け
神泉苑に雨請し　甘露の雨と降してハ　五穀の種を結ぶしめ
國の患を除きさる　功ハ今よろくれなし

此八句ハ。人皇五十三代。淳和天皇の天長元年の春。大師御年五十三。四海大旱魃に。萬民の難義一方ならバ。是に由て大師　敕命を奉て神泉苑に於て。請雨の法を脩行遊ばされ。

普く天下の五穀草木を潤し。一人の御心を安じ。諸人の難義を救くせぬひしるしハ。今の世迫も諸人の能く知所なり。扨雨の降らざるゝ付てハ。五種の因縁。三種の災禍と云ふ。昔釋迦如来在世の時。目連尊者。廣嚴城小出て乞食を行ず。爾時恰も旱魃續きまて。迷惑の折ふし。村人目連尊者

ゝ問て云ふハ。若近日ゝ雨降るや否と。目連尊者答て曰。今日より七日を過て雨降りなんと。諸人聞て大ゝ喜び。夫より各倉稟を開き。諸の種物を出し。段々蒔付とり。然るに七日過て已ゝ雲騰り雷震し。唯小雨降り。纔ゝ掩塵斗を得て。即停息しぬ。時ゝ諸人便市肆街衢の處ゝ於て。皆共ゝ尊者と譏議す。外道の輩之を聞て大ゝ誹謗して曰。沙門釋子無智無覺なりと。此言竟ゝ釋迦如来の御耳ゝ入しゝバ。或時佛説教の席ゝ於て。諸人ゝ仰らるゝハ。汝等諦ゝ聞け。爰ゝ五種の因縁あり。天雨を降さゞる事なり。一ゝハ此大地ゝ其火界あり。虚空ゝ上騰て雨をして燥さしむ。二ゝハ虚空ゝ於て。大風雨起る

事ありて。便此雨を杖林の内。或ハ鞨陵迦蘭若林中ニ吹き。雨とゞて偏ニ此ニ澍がしむ。三ニハ行雨天神。縱逸ニして住し。時〻の間ニ於て。甘雨を此ニ澍ぐず。四ニハ諸の有情。惡法と愛樂し。非分の貪欲を起し。邪見ニ住するニ由る。此事ニ緣るが故ニ。時〻の中ニ於て。天雨を降さゞ。五ニハ羅怙阿修羅王大海より出て。便両手を以て。其雨水を捧げ。大海の中ニ棄つ。當ニ雲興り電擊ち。雷震ひ風驚く時ハ。必雨降べし。然るに目連雨を記する時。羅怙阿修羅手を以て雨を捧て。大海ニ棄つ。然れバ雨無きニ非ざるなり。豈彼れ當時ニ問て言ずや。稼穡皆成熟するやと。爾時ハ目連即事ニ依て答ヘしニ云〻又

漢書七十一之五于定國傳　東海郡張氏の家ニ孝婦有り。少して寡ニして子無し。姑と養ふこと甚謹めり。姑之を嫁せんと欲すれども肯ぜず。姑鄰人ニ謂て曰。孝婦我ニ事へて勤苦せり。我老さり。久しく丁壯と累さんやと云て。乃自經て死す。姑が女吏ニ告て曰。婦吾母を殺せりと。吏之を驗すること急なり。孝婦自誣ニ服す。因て獄を具へて府ニ上る。太守竟ニ孝婦を論殺す。郡中枯旱すること三年。諸人大ニ難苦す。後其冤死なると知て。太守至て自孝婦の冢を祭る。天立處ニ雨と降して歲熟そと。是等ハ天罰なり。其餘或ハ大風。地震。牛禍。心服の痾。疫癘の類ハ。皆時運なり。又惡業の衆生。同じく惡時ニ生れて。業感の故ト。是

の如くの災を招く。守護經王法正論經是を業感と云なり。大師の雨を祈りぬひし時なり。七日の間曾て雨降らず。大師不審を思召て。即定に入て觀ぬよに。果して羅怙阿修羅有て雨を妨げ降さざるなり。羅怙阿修羅とへ。惣じて人の善事を嫉妬し。我慢増長の天魔外道と云なり。是に由て更に二日の日延を請して。天竺の無熱池に住ぬに。善女龍王と云。大勢力の龍王と勸請して。祈りぬよに。長八寸斗の。金色の龍王となりて。九尺斗の青龍の頂に乗り。池中に忽に現れとり。此由を速に奏聞しぬに。帝甚感なりて。敕使和氣眞縄。龍王を拜し見て。御幣種〻の寶物を供ずるに。須臾に風起り雲覆ひて。雨降る事三日三夜普く天下の五穀草木を潤しぬること如き。鎮護國家の利益。又悉く舉て言べからず。斯く現在の諸願を満しぬに。未来の速なるを以て。未来の事知べきなり。三界火宅の裏に焼るゝ。其れ斗藪して早く法身の里に入れと。御勸下さるゝと幸に。

いつまでか。明ぬ暮ぬと。營まん。身に限なり。事に盡せず。

思に。一つなるへし。又二つ。三つ四つ五つ。六つ。うしの世や。限なる命に。限無き望事最早大抵に閣て。大師に御縋り申て。早く三界の火宅を出て。浄土の郷里に立歸り。老ず死るずの

樂を得動らず騒ぎぬ證を發きなば。豈樂しからずや

野峯松韻卷下

第六濟世造字

吾日本の人民に　文化の花を咲せんと　金口の眞説四句の偈を

國字は作る短歌　いろはにほへとちりぬるを　わかよたれそつねならむ

うゐのおくやまけふこえて　あさきゆめみしゑひもせす

此句ハ。惣じて昔の人ハ。皆質朴ふして。何事も有増なり。然る

と世間ハ付き出世ハ付き。智識を開らしめんと思召て。涅槃

經の四句の偈を和げて。吾國風の短歌ハ作り。貴賤男女老幼

智愚。皆各其益を得せしむ。此いろは四十七字ハ。本梵字の四

十七言は基けり。由て、アイウエオ等の五十字門なり。而して五十字は。同音同字を出せども。いろはは之を出さず。都て御製作の本意は。日本の人民を。開化の域へ誘ひんの外無し。扨開化と云ふ付て。意得様が大事なり。動もすれば今時の人は。開化の二字を解し誤て。僧侶は寺院へ住職しながら。肉食妻帯俗服着用し。佛祖の教誡をば。陶犬尾雞へ比し。庫裏を賣とう八重垣と造るとう。教誡のことは一切取合ず。佛法が頭痛ふなると云様な先生が。折〻新聞の中へ現れて。僧侶仲間の顔汙しするは。實へ困入と者。又世間の人へも。折〻見受る所が。隨分賢い人じゃ。發明な人ドやと云れる人が。いつゝは大和魂が飛去て。赤髯の風へ泥〻手へは蝙蝠體へは蔦。ヒヤツポゝづいて斗さへ喰へば。開化の様へ意得て。吾身の分限とも顧ず。種〻様〻と驕を極め。却て古風な人を見れば。頑固者じやとゝ開けぬとう云て。冷笑し。一年ゝ二年程は。夢中へ成て騒で居るが。結句の果の大節季には。算用が合はぬ故。彼處へ頼で五十圓ゝり。此へ往ては百圓ゝり。夫より次第〻へ勝手が悪しく成り。竟へ身代限と出掛。捌馴〻處の水も飲めぬ様へなり。一旦恩を受けゝ他人へは大損ゝけ。年の寄〻親等や妻子迫へ。種〻と難難辛苦とさせ。其が為へいつゝ本心が狂ひ善事へは思付ず。悪しき事をば色〻と勘出し。現

在諸人は後指をさゝれ。永き未來を取損ふも。皆外の事ハ無くて。其本と尋れバ。開化の二字の誤解より起れり。眞の開化と云ハ先ゝうじや。第一は人間今日の當務と云ふを意得るバるゝ。其當務と云ハ。心地觀經は。世間の恩は四種なり。一は父母の恩。二は國王の恩。三は衆生の恩。四は三寶の恩。此の如くの四恩ハ。一衆生平等は荷負すと說ぬひて。父母の恩ハ昊天極罔し。若親の恩を知て親の心は背ゝバ。唯我身を父母は打任すの意は成さゝすれバ。手の舞足の蹈處。皆孝行はるらゞゝ云ふ無し。若又父母の言所。大は道は背けるゝ有らバ。隨分面を柔らげ。言とゝやうはして。諫めまからすべし。いつゝ申とゝ聞入ぬハざる時ハ。唯眞實心の涙をこぼし。從ひ奉るべし。多くハ我身勝手より。親を悪しと思ふと有る者なれバ。能く是を慎むべし。別して親の諫を用ひざるハ。不孝の第一なり

とり〳〵は。ならバと思ふ。涙うな。親の諫ハ。今ぞ知られて。親の過去て。後は思當るなり。孝經は。父は事ふるは資て。以て君は事ふれバ。則忠なりと有て。親の恩を知者ハ。必君の恩を知る。世間は其例多ければ。委〳〵云は及ぐバ。又國王の御恩廣大なるゝ。勝て言べらずと雖聊其一を語らバ。上ふ國王在して。法度を立給ふが故は。下は横行の者無く。貴ル賤ル。

富めるも貧しきも。共に日々の勤を終れば。枕を高くして夜を安く寐らるゝ。是國王の御恩に非ずや。されば國王の御恩と思へ。能く國の法度を守るべし。次に三寶の恩とは。佛と法と僧との恩なり。佛の衆生を憐みたまふこと。猶人の親の子を思ふよりも深く。其機根に應じ。種々の法を說て。現世後世と救はぬ。其法尊く雖獨らず。僧能く是を弘むるが故に。佛法僧を三寶と云ふ。恩を知らば其分相應に力を添て。佛法を世に絶ざる樣にすべし。復衆生の恩とは。我人をはじめ。凡そ生を受し生ける者。皆生々世々。互に恩なり。近くは今日妻子兄弟眷屬。牛馬に至るまで。互に恩を掛たりかけられたり。

更に窮りなる事無し。此理を會得し。身に行ひ勤さる上に。智慧有て學ぶならば。何なりとも人の爲になる所の藝能を研磨し。さて得さならば。それこそ眞の開化とも云ぶきなれ。大師の文化の花を咲せんと思召所の。其開化と云は。唯此外に有事無し。且又大師の御時迫は。未日本に國字と云もの無りし故。和言を漢字に移して教ふれども。和國の風俗に非ざれば。和氣少くして。野蠻の風を免れぬ。是故にいろは四十七字を作りて教つゝ。國音能所等の文字。其差異自明なりて。鳥の林に囀り。蟲の野に鳴くまで。皆自然の聲にして其理ならざる。寔に百學の原を開き。而して巧に經の意を述

て人と〻して知らず〻。顯密大小乘の法中は優遊せしめ遂おハ天下萬世入學必要の門戸となるしるべ。誠は古今の文明開化擴充智識の第一等なりと謂べし。大師の右樣世間出世間は付き、色〻御苦勞下さる御恩を思へ人ハ。開化の二字を解し誤らざる樣はして。四恩の鴻德を報ずるは。肝要なり

第七假字廣益

いろはの無智の稚子　習ひ易き筆の跡　されども總持の文字なれば知れば知るほど意味深し　僅か四十七字にて　百事を通ずる便利なり思へば萬國天の下　御恩を受ざる人なし

此八句ハ。いろはの五つ六つの子供はてゝ。隨分教へ〻書せバ。〻〻〻〻程の覺え易き文字なれども。總持の文字として。釋尊御一代説せゐ所の八萬聖教の深意を。含まさるゐろはなれバ。學べバ學ぶ程。義理深くして限無し。且又文字の負ハ。僅か四十七字なれども。百事として。何の用事も通ぜざるとなし。されバ上ハ月卿雲客の和歌より。下ハ小店の賣物の標記。且器械の上等とも云。電信機ハ至るまで。皆いろはの文字を用ひざるハ無し。されバ實ハ萬國ハ通用し。人民齊しく。大師の御恩を受ざる者無し。と云〻を述べるおり。いろはの文字の意味深きをハ。先ハ粗演とる如く。八萬の聖教を含藏しさる文字なれバ。中〻容易ハ說難き事なれども。且く世

聞を約して。聊之を述れば
待てといふを。散らでし留
る。物ならば。何を櫻を思ひ
増さまし
何程立派を咲くる櫻の花も。
暫時の間を散てしまふ。餘り
名残が惜いから。遍てハ二三
日なりとも。散らずに待てく
れと云を。留るべき物なら
ば。物思も無けれども。迚も留

る物ふも非ず。今日の人間も其如く男ふもせよ女ふもきを。
十四五から二十計迄ハ。いかふも美しいが。程なく女子なら
バ嫁し。子が出来る世持をせねバならぬ。姑を氣兼をせねバ
ならぬ。色〻と苦勞を重ぬると。俄に年が寄て。本の姿をのら
ぬ。猶其外を心も柔和を。生付もよし。蝶を花を。十二三迄育
てゝ。追付盛りと云所を至て。老少不定の世の中なれバ。思
掛なく無常の風が。颯と吹来りて。御中が痛い足が痛いと言
出しされバ。家内擧て醫者を藥を。心も空を心配すれども。
定業なれバ道るべき道も無し。天を仰いて嘆けども何の役
をなゝず。花の散が如くを。死でしまふ。世の中の有様ハ。皆此

通りぞと云ふと。色ハ匂へど散ぬるを。と述さるなり。次句ハ。吾が世誰ぞ常ならんとハ。男子ならバ最早二十餘ハも成されバ。妻を迎へて。一家の主となり。産業を怠らぬ様勤め行ひ。何卒親より受取さる家財を。減さぬ様親達へ孝行せねばならず。子も育てねばならず。世間の付合もせねばならず。中く容易ならぬ心配事。それハ萬事障なく。一生を過す人ハ稀ハして。不仕合なる人多分なり。若仕合能くして。我思ふまゝハ家財ハふやし。家内中よく無事息災。何事も十分ハ有ると所が。いつまでも久しくとハ。三四十年ハ過きし。況や今日とも知らぬ身上なれバ。吾世と云ハ暫時のもどやと云ふと。述さるなり。次句ハ壯年より年の寄るまで。隨分人の人さる道を守り。吉ハ付け凶ハ付け。人界有為の作業を。勤め行ふ〻〻云ふと。うゐのおくやまけふこゑて。と述さり。次句浅き夢見し醉ハ。若き時分ハ夢うつゝと成て。博奕をしさり醉狂しさり。放埒惰弱ハ身と持崩し。世間の子供ハ身持が好ハ。こちの奴めハ何の因果ぞ。情なやと。親ハ熱い涙をこぼさきし様ハ事ハ。更ハ無うつさと云ふを。述さるなり。又是と出世間ハ約して述れバ。昔天竺に。善生長者と云し人ハり。二歳の時父ハ離れ。家産大ハ衰へ。其母貧苦の中ハ養育せし子なれバとて。名を貧生と呼べり。此貧生童子十二の年。祇園精舎へ参

詣して。一比丘の説教を聞くに。佛世尊及び大衆を供養せば。其功德に由て。未來天上に生ずと云ふを聞て。子供ながら大に發心し。折角人間に生來さなれど。此世ハ假の世。どうで遲う早いう。一度ハ死で往らゝばならぬ未來のことなれば。何卒三惡道へゆうぬ樣。母諸共に。天上淨土へ生れさゝ物ドやと思ひ。家に歸り此事を。逐一母に語れば。母是を聞。目に淚を浮べて。告て曰。汝二つの年に父と亡ひ。家も貧しくなり漸く親類に便りて。今日を送る。汝が束脩の直すら。充さゞ。何を以て。世尊大衆を供ぜん。童子之を聞深く感ん。夫より母に謀りて。客作人となり。辛苦すること已に五年なり。遂に五百の金錢を

得て。大に悅び。乃世尊並に大衆を供ず。此事廣く世に聞かゝ時に王舍城に。首望長者と云ふ人あり。女子のみ有て男子無し。乃三さびらるひて。世子を求るに。竟に貧生童子。之に當れり。由て首望長者の席を董す。善業力の故に。宅中珍財盛大にして。其富毘沙門天王の如し。衆人曰て善生長者と稱す。更に又佛世尊大衆を請ず。慇懃に供養し。法語を聞き。三歸五戒を受け。遂に初果を得たり。彼善生長者年少にして。人界の果無きを思ひ感心せられさるが。即色ハ匂へど散ぬるをの道理なり。又假の世なれバ。いつ迫る居られぬ物と云事を深く心に覺りさるが。我世誰ぞ常ならむと云に當れり。又五年の間無

事ゑ働き。五百の金銭を得さるが。即有為の奥山今日越てと云所なり。更ゑ佛を供養し。往生浄土の願を遂げて。五欲の夢ふも迷さば無明の酒ゑも醉ゎせざりしと云所を。浅き夢見じ醉も為ずと云るなり。各方此所を能く聽聞しぬへ。昔の貧生童子ハ。子供意ゑ。何卒未来を助りたいと思ふ斗ふ。貧しけれども元家柄の子なれバ。身ふも習てぬ日雇ゎせぎ。艱難辛苦と厭もさず。哀なるゑを數年の間。ちはりくし其膏血なる賃銭を以て。佛様や羅漢様と御供養申さときけバ

奥山ゑ。紅葉踊わけ。鳴鹿の聲きく時ぞ。秋ハ悲しきとある歌の姿ゑ能く似て。貧乏な秋程悲しい者ハ無し。さとが竟ゑ

ハ其功徳ゑ依て。思掛無き首望長者の跡と継ぎ。其上ゑ目出度悟を開きしハ。未来迫も待さば。此世ゎら早極樂浄土。今ハ大師の御誓ゑ御縋り申て

和田の原。八十島ゎけて。漕出ぬと。人ゑハ告よ。海人の釣舟。

と云様なる辛苦をも見ず。僅ゑ日課の光明眞言を唱さへすれバ。容易く浄土往生を遂ゎらゝと云ハ。是偏ゑ大師の御蔭ゎらずや。依て昔の人の事も想像して。信心を凝すべきなり

第八 利生遺跡

猶も誓の其中ゑ　五穀豊熟富貴　家運長久智慧愛敬
息災延命且易産　殊ゑ見る目も浅き　業病難病受し身ハ

八十八の遺跡をよせて利益を成しるゝ

此八句ハ。大師の御誓願の廣大なるを述ぶ。惣じて人界の分野と見るに。信心善行の人をも。家運拙く。貧窮を有とり短命を有とり。或ハ子供が育とぬも有り。又ハ不信惡行の人をも。富貴延命子供も數多なる功り。是を由て之を觀れバ。善惡報應の説ハ。一定の事を非ずと。疑ふ人も無を非ざるべし。然れども。假令百劫を經とも。所作の業亡ず難し。因緣會遇の時。果報還てゝづゝら受くと。毘奈耶説ぬひて。善惡の業報。微塵も違ふ事ハ無きなり。何となれバ。業を順現業。順次業順後業の三の不同あり。順現業ハ一生の内を報を受け。順次業ハ次の生を報と受け。順後業ハ其後の生を報と受く。是其善惡をなす時の心の强きと弱きとを依て。此不同ありるなり。人知ぬ心の罪と。最も恐れ慎むべき所以なり。凡そ信心深き人の現世を災難などを遭とハ。前世今生の重き罪を滅して。後世を助くる利益ならんも知可らず。不空羂索經を。重を轉じて軽く受しむ。一日二日乃至七日の瘧病熱病を受け。或ハ人を謗られ。禁閉せられ。餘の惡事を遭ひ。不祥の夢を見る等。是等の輕苦と以て。能く地獄の劇苦。重報の罪を禳ふゝ有可しと説ぬつり。眞言ハ。大日如來十方諸佛と共を。三世常恒神力加持の法なるが故か。其利益を正像末の異なくして。現世後生の諸

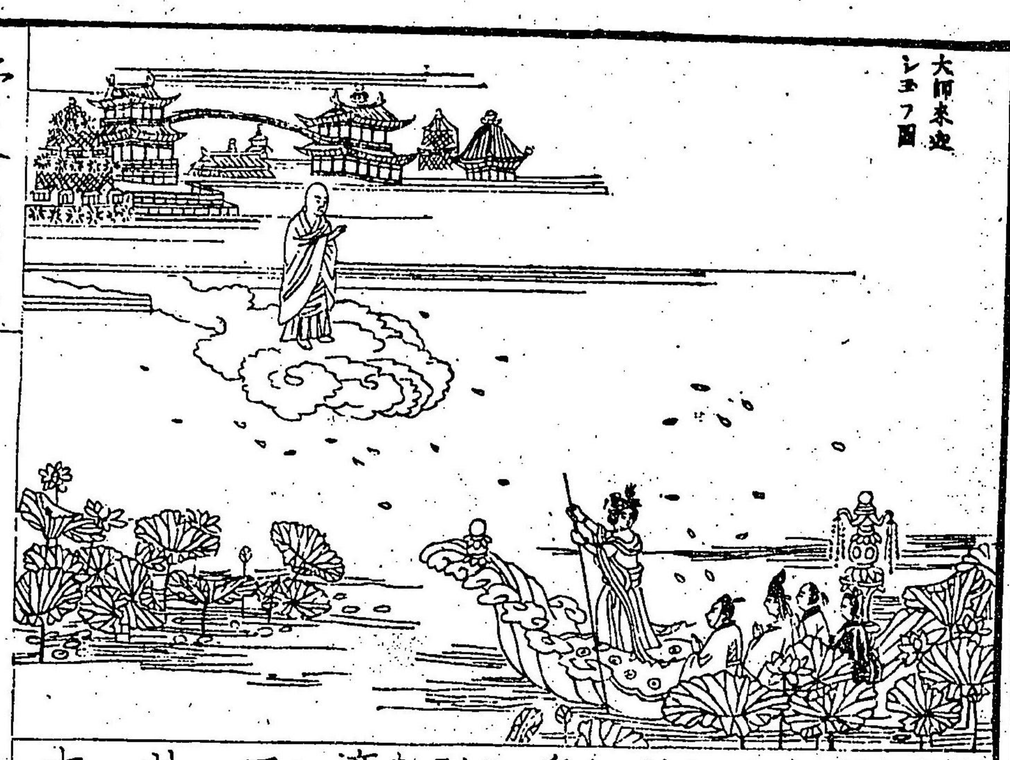
願速に満足すると。經の中に廣く説ぬひて。其法驗古今其例多けれども。末代下根の在家ハ。其修行に堪ざれバ。但何事も生れ合せに任せて。非分の富貴出世を祈るべからば。又祈りとして。宿植の福善無くして。叶ふべき者にも非ず。或鼠が牝兒をまうけて育てゝ。天下に比無き好き聟を取らんと。むほけ無くも思ひ企てゝ。日天子あそ。世を照し給ふ德日出度けれと思ひて。朝日の出給ふに對して。女を持て候。貌形なざらうに候へバ。まゐらせんと申す。我ハ世間を照す德あれども。雲に會ぬれバ光も無くなるなり。雲を聟に取れと仰せられけれバ。誠にと思ひて。黒雲の見ゆるに逢て。此由申す。我ハ日光をうくに德あれども。風に吹立られぬれバ。何ても無し。風を聟にせよと云。さもと思ひて。山風の吹けるに向ひて。此由を申す。我ハ雲を吹き。木草をも吹靡らに德なれども。築地に逢ぬれバ。力無きなり。築地を聟にせよと云。實よもと思ひて。築地に此由を云に。我ハ風に動らぬ德あれども。鼠に掘らるゝ時。堪難きなりと云ければ。さらバ鼠ハ。何にも勝さりとて。鼠を聟に取きりと。是も非分の願にこそ。沙石集爾いてゝバとて。本より真言にハ。天下の災難を禳ひ。國家の運を增し。風雨和順五穀成熟。朝敵退散怨念降伏。病氣平愈安産延壽等の法備りさればバ。身分相應の。或ハ病氣平愈五穀成熟。安産求子

等の祈を止めよと云ふ非ず。然れども其等のこゝハ。祈願寺又氏宮へ頼し。其祈禱ハ打任せて。我身ハ但後生菩提の信心。相續きへすれバ。良田地ハ種と蒔ぐ如く。祈念祈禱の驗速ハあらこれ。現世後世自安穏なり。蓋現世のこゝハ。過去ハて造りし善惡の種。已ハ生じぬる後なるが故ハ。之と轉ぜんと難し。未来のこゝハ。善惡の種未生ぜざる前のこゝ故ハ。是と轉ぜんと易きなり。若信心深き人ならバ。設ひ現世の所願ハ叶ひとも。未來ハ必淨土ハ往生せんと。決定して疑ひ無きなり。又凡そ災難と受るハ。定業非業の二種の因縁あり。不必受報として。非業の災難と。大乘經典と讀誦それバ。是を免れ。讀誦せざれバ。免る事能ハずと。智度論ハ說のひぬきど。眞言陀羅尼の功德ハ。定業とも轉じて。報と受ざらしむといふ旨ハ。陀羅尼集經ハ。常ハ誦じて忘ハ、こゝ無けれバ。定受の業とも又消滅せしひと說ぬへり。されバ大般若經。法華經等の。大乘經と讀誦するハ。必眞言の祕法と兼行すると。宜ならずや。去ながら下根淺識の人の修行ハて。定業と轉ずる程の功力ハ。非ずと雖。水大乘經典ハ勝れとる。御誓願の眞言なれバ。其修行せる程の功德ハ。猶勝りぬべし。又在家と雖。彌信心堅固ならん人ハ。定業と轉ぜんと。無ハしも非ざるべし。今其一驗と舉るバ。島根縣下。出雲國出雲郡。求院村の豪家ハ。矢野倉右衛門と云る

者なり。村の島津氏と娶りて。男子一人を生む。名ハ信一と云。此子五才の時父倉右衛門宿業の報いし所なや。俄に悪瘡と發せり。醫療百方すれども。其驗更に無し。時に其妻島津氏の親屬竊に離縁を促す。夫倉右衛門も亦。宿業の免れ難きを感心して。常に来世の事のみを願ひ。此世に更に望無けれバ。其妻の不遇を憐て。父母の家に歸らんとを勸む。然るに其妻曰。女ハ一度嫁して。復他に行くを恥づ。況や夫の難病を見ながら。何ぞ捨て去に忍びんやと。爰に於て常に弘法大師を信仰し。光明眞言を唱へ〻。夫の志を資く。子信一又稚く雖。父母に孝なり。明治十年の春。信一八歳。母島津氏。更に一の大願を發し。四國に行て。弘法大師の遺跡を拜禮し。且同じく靈場を拜禮の人三萬人を限り。金一千圓を分ちて施行せんと。乃子信一。並に親族の者一人。僕一人を携へて。参拜すると甚謹めり。或夜の夢に。威容の人來て告て曰。汝等が祈る所の病夫ハ。過去の重罪の報にて。一度重病を身に受とれども。光明眞言の功力。並に無遮施の功徳に由て。此度ハ必平愈すべし。猶信心怠らずハ。當來必淨土に生ずへしと。夢さめて人〻と共に。相語て歡喜の涙を流し。夫より信心ますます堅固なりしに。果して出雲より。病氣日増に平愈しつる由を知らせんとて。態〻人をおこせけるに。七十七番の靈場。讃岐國道隆寺にて行

會ひ。共に語て感涙袖を濕し。弥大師の御誓願を喜びけりと云へり。後世を願へバ。現世ハおのづから安穏ならんと。稲を願へバ。藁ハ自得らるゝが如し。然るに世の富貴なるハ。富貴にほこりて後世のことを思ざゝ。貧賤なるハ。貧賤を憂ひて現世の事のゝを思ひ。共に一生空しく暮し。忽死に臨て。俄に悔恐るハ。愚に悲しき事に非ずやされバ又後世の安心究る時ハ。富で驕らず貧にして諂ざゝ。いかなる病苦貧苦災難に遭ひ。死に臨ひ斗の事に逢とゝ。其心泰然として。亂るゝこと無し。生れて佛法に逢へる甲斐ハ。誰しもかく有度こゝなり

第九苦海得船



大師来迎レヨフ図

惡業深き我しハ
繫がぬ沖の捨小船
生死の苦海果もあし
誰を便の網手繩
爰に三地の菩薩あり
弘誓の船に櫓械取り
濟みゝる御慈悲の
不思議ハ世〳〵に新なり

此八句の意ハ。實に我等に如き。十悪心に快して。日夜に作り。六

度耳ゟ逆ひて。心ハ入らず。人を謗り法を謗りて。焼種の罪を顧ず。いつ迄ゟ生ながらへ居らゝ様ハ意得。佛とも法とも思ずして。うゝ〳〵と年月を送り。而して年が寄て後ハ。追〳〵體ハ不自由ハなり。古歌ハ。

いゝふしで。我世盡さん。世中ハ。老を厭へぬ。人し無けきバと若き者ハ忌嫌て。心細くなるまゝ。流石ハ本覺内ハ薫ず。佛光外ハ射して。儻後世の事を思出を有れども。若き時ゝ三毒五欲ハ凝り堅まり。信心ゟ佛參ゟ。為つけぬを故つい其儘止でしまゝ。煩悩ハ家の犬。打てども去らず。菩提ハ山の鹿。招けども來らず。唯人と咄すゝみゟ。世上の盗人咄やら。若き時の力業やら。詮も無き空言斗一寸先の一大事ハ茫然として。譬へバ繋がぬ沖の舩の如く。便も綱も切果さ困り者。爾るを大師ハ御見捨無く。虚空盡き。衆生盡き。涅槃盡きバ。我願も盡むと。寔ハ〳〵御氣長い御誓願を發させゝひて。果しも無き生死の大海ハ。弘誓の舩を浮べゝひ。種ゝ様〳〵と御意を盡し。遂ハ易行の中の易行門を開きて。結縁往生の旨を示し。斯る軟緩者迄ゟ。一切漏すと無く。纔ハ一見寧覩婆の功德を以て。淨土往生させて賜ハる。猶其上ハ。土砂加持の功德と云ものが有て。宿縁拙くして。生涯善縁ハ値ふと能ずず。一旦地獄ハ墮さる者迄ゟ。皆悉く資くる所の。祕法をも授け

ぬ。不空羂索經に曰。若衆生有て。十悪五逆四重の罪過を積
とも。此光明眞言。一遍二遍乃至七遍。耳に聞て尊ぶこゝらバ。
即一切の罪障を消滅すべしと。是ハ唯耳に聞き。有難しと尊
ぶ斗の功德利益なり。況や常に唱へる功德をや。若諸の衆生。
具に十惡五逆四重の諸罪を造ると。猶三千世界の微塵の數
の如くにして。死して諸の惡趣に墮して。苦を受ること間無ら
んに。此光明眞言を唱へて。土砂を加持すること一百八遍して。
其土砂を以て。亡者の死骸の上に散し。或ハ墓處に散せバ。彼
亡者。若ハ地獄餓鬼畜生。修羅の中に有らんに。大日如來眞實
本願の。大灌頂光明眞言の。神通威力。土砂を加持する力を以
て。即時に光明亡者の身を照すことを得て。諸の罪報を除き。苦
身を離れ。西方極樂國土に往生して。蓮華臺に坐し。乃菩提に
至る迄。更に墮落せじと說ゐへり。扨右樣光明眞言の功德。並
に大師の御誓の。甚深廣大なることを。重く演舌に及びされど。
是を唯昔物語の樣に意得てハ。大に相違すべし。本より末代
の利益と。多く說ゐへる密教なれバ。和讃の末の句に。不思議
ハ世くに新なりと述べる如く。昔も今も。信心決定ならん人
にハ。不思議なることも間有るなり。讃州鹽飽に。高見嶋と云あ
り。此島に理性院とて。余が法緣の寺あり。其寺の檀家に。傳兵
衛と云る者の老母。名ハくらと云あり。此老婆若年の時父母

より離れ。子もなく兄弟も無く。親類も無けきバ。大き家産を失ひ。朝夕の烟も絶しを。有り無らの世を渡れり。年五十斗にして。全く盲とるか非ざれど。両眼稍光薄くなりて。難義の上に難義に及べり。然るに光明眞言を唱へると。日夜怠らざりしが。村人之を憐で。隣家の女名ハまさと云ると。養女とり。まさ女養母に仕へく。甚謹めり。是に由て養母大に悦び。世に比無き者と思へり。而して老婆ハ唯行住坐卧に。光明眞言を唱ふるを以て。業となすのみ。まさ女年二十斗にして。媒人ありて。今の傳兵衛を賀とす。夫婦共に産業を大切にし。且母に孝養をすること。人の賞嘆する所なりしが。年を追て家大に富み。凡そ二百戸斗の村にて。二三と稱するに至れり。又官より命ありて。傳兵衛を里正とるに。傳兵衛性質人を待すること慈にして。因て村中大に治る。明治二年の春。養母年八十餘にして。口ふ光明眞言を唱へながら。目出度往生を遂げり。余つら〳〵之を考へるに。抑貧女何の術有て。能く此の如く。息災延命愛敬福貴。夫婦孝養正念臨終。遂に二世の願を成就せしや。是全く光明眞言の功德。大師の加持力に依なり。無叱の誓願を喜奉て

果も無き。憂世の塵に。拂ふる。高野の山の。峯の松風

野峯松韻卷下終

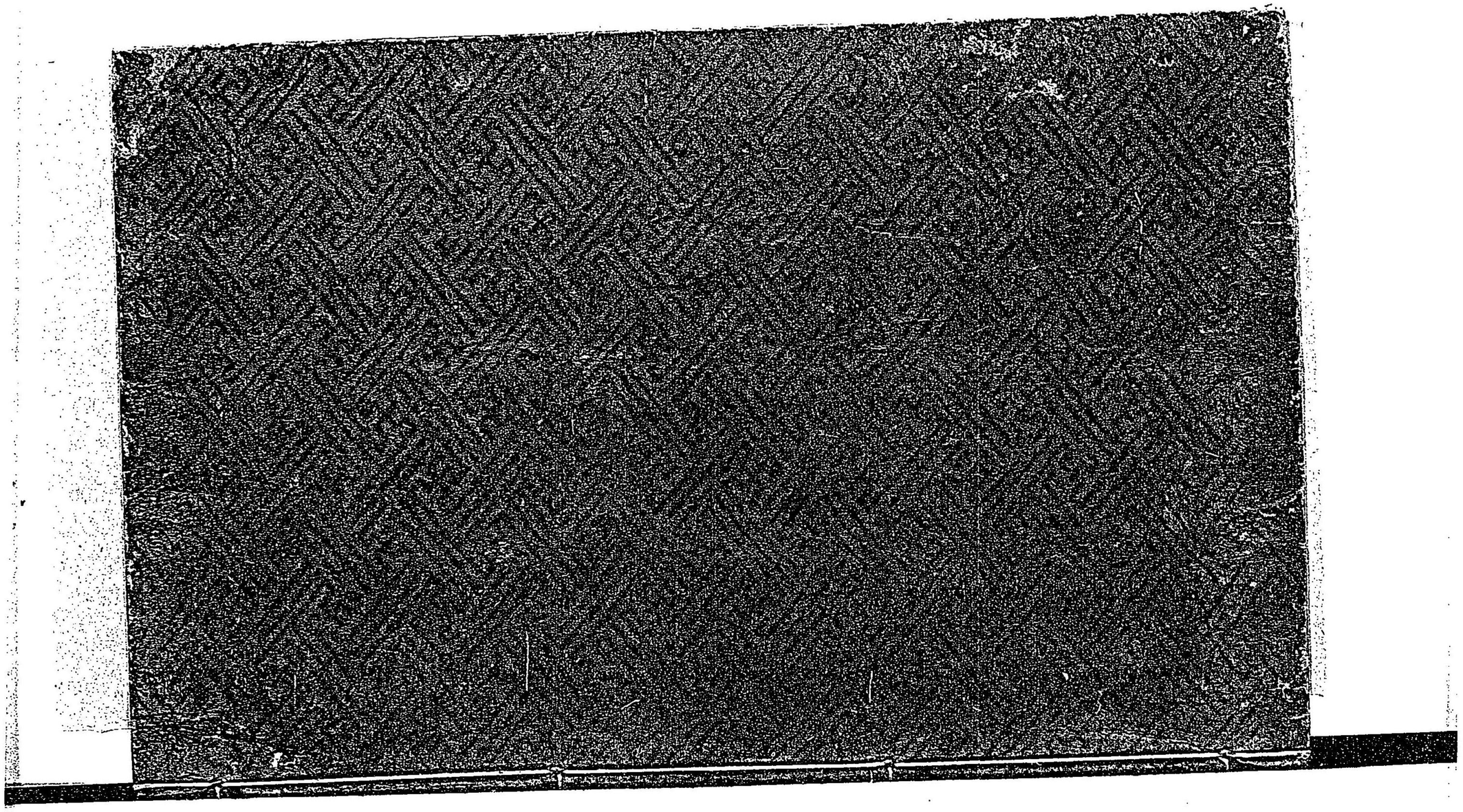
9
964

明治十一年十一月四日出版御届

著述人　廣嶋縣平民　大講義佐伯慈明
住所備後國御調郡後地村

出版人　和歌山縣平民　中講義前川隆棧
住所本所區元町大德院側

諸宗御書籍御用製本所
東京新橋八官町十七番地
明教書肆
大坂高麗橋一丁目三番地
明教書肆



ISSEIDO
東京 神田

大講義

佐伯慈明著

弘法大師
和讃略解

野峰松敦

眞言宗大教院藏版

77W12657

大講義